

メタ認知と自己有能感は学生の教師像に影響するか

## メタ認知と自己有能感は学生の教師像に影響するか

Do Metacognition and Competence Affect Image of Ideal Teacher of Students?

菊野 春雄                      菊野 雄一郎                      李 琦                      山田 悟史  
Haruo KIKUNO                      Yuichiro KIKUNO                      Qi LI                      Satoshi YAMADA

(平成29年10月3日受理)

### 要旨

本研究の目的は、教師を目指す大学生が理想とする教師像に対して自己有能感とメタ認知の要因がどのように影響するのかを調べることであった。そのため、大学生に対して理想とする教師像とメタ認知・教職に対する有能感の関係を調べた。その結果、教師像と教職に対する自己有能感との間に有意な関係は見られなかった。しかし、教師像とメタ認知、特にメタ認知的知識と教師像の関係は有意であった。これらの結果は、高いメタ認知を持った大学生ほど、クラス集団におけるより強い遂行機能と維持機能を持った教師を理想とすることを示唆している。

### 1. 問題と目的

教師を目指す学生は、教員養成機関で授業を受け、教育実習を経験し、学校現場で授業を行うなどの経験をしながら徐々に教師としての成長を遂げていく。このように学生が、新任教師、さらにベテラン教師へと熟達していく。このような教師の熟達過程を解明していくことは、より優れた教師を養成するためにも重要な課題である。この教師の熟達過程には、いくつかの要因が影響していると仮定され、その要因を探ることが重要である。その一つの要因として、学生が目指す将来の教師のモデルであり、その理想とする教師像どのように持つかが重要である。そこで、本研究では、教員を目指す大学生が理想とする教師像とはどのようなものであるのか、教師像についてどのような要因が影響するのかを明らかにしようとした。特に本研究では、理想とする教師像に影響する要因として、教職に対する自己有能感とメタ認知に焦点を絞って検討した。すなわち、自己有能感 (competence) とは、問題に対して自信をもって対処できる能力であり、内発的動機づけと密接に関係している (Deci, 1975)。また、メタ認知 (Metacognition) とは、自分の思考や行動を自分自身で客観的に認識する機能である (Flavell, 1976)。

それでは、教職を目指す学生はどのような教師を理想としているのであろうか。授業を受ける立場の中高校生の理想とする教師像と教師を目指す大学生の教師像とは異なるのであろうか。高校生はどのような教師を理想としているのであろうか。保坂 (2004b) は、教師像について、PM理論に基づくPM尺度 (三隅・吉崎・篠原, 1977) を用いて調べている。PM理論では、リーダーシップは、P機能 (Performance function) とM機能 (Maintenance function) の2つの機能によって構成されていると仮定している (たとえ

ば、三隅・吉崎・篠原, 1977)。P機能とは目標達成機能であり、集団の持っている目標を達成するように促し強化するリーダーの機能である。M機能とは集団維持機能であり、集団内の関係を維持し促進強化する機能である。保坂は、高校生を調査協力者としてPM尺度を用いて理想とする教師像を調べている。その結果、成績の上位者と下位者で理想とする教師像が異なっていた。成績上位の高校生は、P機能の強い指導力を期待していたが、成績下位者は、P機能的要素とM機能的要素の強い指導力を期待しているとの結果が得られた。この結果は、教師像に個人差が影響することを示唆している。

また、保坂(2003a; 2003b; 2004a; 2004b)は、中学生と高校生がどのような英語教師を理想とするのかを調べている。保坂(2003b)は、中学生を調査協力者として、理想的な英語教師の因子として8つの因子を抽出している。すなわち、「カウンセリング・マインドで生徒に接し、学力をつける授業をする」「英語の高い運用能力を持ち、コミュニケーション能力がつく楽しい授業をする」「知識・教養が豊かで質の高い授業をする」「厳しく指導し英語力をつける」「生徒の立場に立った授業をする」「人間性がすぐれ、生き方を考えさせる授業をする」「総合的な英語力がある」「授業と関係ない話をする」の要因が抽出された。これらの結果は、中学生や高校生は、厳しく指導していくP機能の強い教師やコミュニケーション能力がつく楽しい授業をするなどM機能を持った教師を理想としていることを示唆している。

それでは、教員を目指す学生はどのような教師像を持っているのであろうか。この点について、松永(2015)は、幼稚園・小学校教員免許状の取得を希望する学生を調査協力者として、理想とする教師像を調べている。その結果、教師は厳しいだけでなく、基本的には優しい教師を求めていることが認められた。そして、親身になって子どもの相談に乗るなど、距離の近い教師を理想的な教師像としていることが認められた。また、豊田・三木(1996)は、教職を目指す大学生と現職教師に、理想的な教師の特徴を記述させている。その結果、大学生は教師の人間性に関する特徴を理想的教師像において重視していたが、現職教師は児童や生徒の理解を重視していることが認められた。さらに、石崎(2014)は教育実習に行かない非教育実習生と教育実習生を調査協力者として、教師の資質能力について質問している。その結果、非教育実習生に比べ教育実習生の方が、教職に対して高い理想像を持っていることが明らかになった。そして、教育実習を経験しても、理想像は大きく変化しないことも明らかになった。この点について、理想のモデルとなる教員と出会えなかったなどが原因であると考察している。これらの結果は、大学生は理想とする教師像として、教師の人間性に関する特徴が重要であること、教育実習等でモデルになる教師に出会う大切さを示唆している。そして、P機能よりもM機能を重視した教師を理想とする教師像と考えているように思われる。

中学高校生を対象とした研究と教員を志望する大学生を対象とした研究で差が見られる。これは、それぞれの視点の違いからきているのではないだろうか、中学生や高校生の場合、授業を受ける立場から理想とする教師を考えている。他方、教師をめざす大学生の場合、授業を受けるというよりも、自分が授業を行うという能動的立場からの理想とする教師像である。そのことにより、教師を目指す大学生が理想とする教師像が中学生や高校生とは異なったのではないだろうか。

本研究では、理想とする教師像にかかわる要因の一つとして、教職に対する有能感を仮

定している。教員養成課程では教科教育法などの科目を受講する機会が多く、学生の視点も教授法に視点に行く傾向がある。M機能である子どもとの関係よりも子どもの学習を指導していくP機能に比重がかかるだろう。そのため、教授法についての有能感が強いほど、理想とする教師像はより明確になり、M機能よりもP機能が高い教師を理想とするのではないかと予想される。

しかしながら、理想とする教師像と教職に対する有能感を直接調べた研究は、著者の知る限り見られない。そこで、教職に対する自己有能感が教師の行動にどのように関わるのかについての研究を見てみたい。まず、自己有能感を持つことで教師の行動がどのように変わるのであろうか。新任の教師の教職に対する自己有能感や教師としての自覚や目標は変わるのであろうか。三和・外山(2016)は、小学校、中学校、高等学校の新任教師を対象に、教科指導学習動機と教職における自己有能感、健康状態との関連を調べている。その結果、小中高の新任教師において、内発的動機づけと子ども志向が、授業力の自己認知や子どもの注意・傾聴の態度を媒介にして、教職における自己有能感および健康状態とポジティブな関係が認められた。また、中高の教師において、熟達志向が授業力の自己認知や子どもの注意・傾聴の態度を媒介にして、教職における自己有能感および健康状態とポジティブな関係が認められた。これらの結果は、小学校の教師では、内発的動機づけと子ども志向が教職における自己有能感に影響することを示している。他方、中高の新任教師では、内発的動機づけ・子ども志向・熟達志向が教職における自己有能感に影響することを示している。また、山内(1999)は、教職での自己有能感は、自己評価、アイデンティティ次元など教師の人格的要因や教師ストレスと強く関係していることを明らかにしている。また学校コンサルテーションは各校の特性に応じた教師への心理教育的援助を行うことにより、教職での無力感や疎外感を緩和し自己有能感を高め、教師集団の連携を促すことが明らかとなった。これらの結果は、教職における自己有能感は、教師の授業行動や子どもへの傾聴などにも影響し、さらに、教師の人格やストレスとも関係することを示唆している。

本研究では、理想とする教師像にかかわるもうひとつの要因として、メタ認知を仮定している。しかし、学校におけるメタ認知の育成についての研究が多くみられるが(小川・高垣・清水, 2017; 久坂・中村・平澤・小室・佐々木・佐々木・藤井, 2017)、メタ認知と理想とする教師像の関係を調べた研究は著者の知る限り見られない。それでは、教師を目指す大学生の理想とする教師像とメタ認知との関係についてどのようなことが予想されるだろうか。

メタ認知は、高次の認知であり、「自分の中の自分」とか「自分の認知を客観的に認知する機能」ともいわれ、自分の思考や行動を自分自身で客観的に認識する機能である(Flavell, 1976)。メタ認知をスムーズに機能することにより、我々は主体的に判断し行動できる。このメタ認知は、学校教育現場だけでなく、学校以外の社会的場面などでも応用されている(三宮, 2008など)。メタ認知は以下の5つの下位能力で構成されていると仮定されている(Brown, 1978)。(1)自己の能力の限界を予測する能力。(2)自分にとって今何が問題かを明確にできる能力。(3)問題の適切な解決法に気づき、そして解決策のプランを立てる能力。(4)自分の考えていることが正しいかどうかを点検しモニタリングする能力。(5)実行結果と目標を考慮し、実行中の方略の使用を続行したり、中止することを判断

する能力。このようにメタ認知はいくつかの下位能力によって構成されている。

以上のようにメタ認知は自分の思考や行動を自分自身で客観的に認識する機能を持っている。そのため、メタ認知が高い大学生ほど、自分の理想とする教師像を自分の適性に合わせて明確にかつ適切に判断しイメージできるだろう。そこで、教員を目指す大学生について、メタ認知の高い学生ほど、P機能とM機能の高い教師を理想とする教師像をイメージするのではないだろうかと予想した。

## 2. 方法

### (1)調査協力者

調査協力者は教員養成課程に属し、中学・高校の教員免許状の取得を希望し教員を目指す大学生49名であった。

### (2)研究計画

本研究は、理想とする教師像を従属変数、メタ認知と教職についての有能感を独立変数として、研究を実施した。

### (3)調査手続き

調査対象者に調査用紙を渡し、調査の協力を依頼した。調査を依頼する際、調査協力者に対して、本研究の目的を説明し、調査協力者には調査を同意・拒否する権利があること、調査データに関して匿名でなされ研究者には守秘の義務があること、研究結果を社会にフィードバックするため学会誌等に公表することを説明し、調査参加を依頼した。なお、調査を拒否したい場合は、調査は匿名で個人が特定されないこと、成績等に影響しないこと、調査用紙については提出する必要がないことなどを説明した。その結果、49名中49名全員が回答を提出した。

### (4)調査内容と調査尺度

調査項目は、調査説明文、フェースシート、教師用のリーダーシップについての質問項目、メタ認知の質問項目、教職についての自己有能感で構成されていた。

説明文では、研究者倫理に基づいて、研究題目、研究の目的、研究データの使用される範囲、守秘の義務、社会的フィードバックについて記述した。また、フェースシートでは、調査協力者の性別、きょうだい数、出生順序、教諭免許状の種類についての質問を行った。

理想とする教師のリーダーシップについては、三隅・吉崎・篠原（1977）の作成した学級担任教師のPM式指導行動の測定尺度を用いた。この尺度では、P項目とM項目のそれぞれ5項目の合計10項目で構成されていた。たとえば、P項目では「忘れ物があると注意する」や「宿題などをきちんとするように厳しく言う」などの項目が含まれていた。他方、M項目では、「子どもと一緒に遊ぶ」「全ての子どもを同じように対応する」などの項目が含まれていた。これらの質問項目に対して、被調査者がどのような教師になりたいかを、5つの選択肢から1つを回答させた。回答は、「全く当てはまらない」から「大変よく当てはまる」の6件法で答えを選択するようになっていた。

メタ認知については、阿部・井田（1977）の作成した成人用メタ認知の測定尺度を用いた。この尺度では、モニタリング、コントロール、メタ認知的知識のそれぞれ8項目の合計24項目で構成されていた。たとえば、モニタリングでは「課題が終わった時点で、自分

の立てた目標の達成度を評価している」や「課題や問題が解決した後、すべての選択肢を考慮したかどうか振り返っている」などの項目が含まれていた。コントロールでは、「理解できないときには、やり方を変えてみる」「自分の理解の助けになるようテキストの構成や目次を利用している」などの項目が含まれていた。メタ認知的知識については、「過去に上手くいったやり方を試みている」「自分は何が得意で何が不得意かをわかっている」などの項目が含まれていた。これらの質問項目に対して、6つの選択肢から1つを回答させた。回答は、「全く当てはまらない」から「大変よく当てはまる」の6件法で答えを選択するようになっていた。

自己有能感については、山内・小林（2000）の作成した教職に対する自己有能感の測定尺度を用いた。自己有能感の尺度は10項目で構成されていた。たとえば、「授業の指導計画・実践することに、自信がある」「私は有能な教師になれるだろう」「教師になるには、自分は無力と覚えることがある」などの項目が含まれていた。これらの質問項目に対して、6つの選択肢から1つを回答させた。回答は、「全く当てはまらない」から「大変よく当てはまる」の6件法で答えを選択するようになっていた。

### 3. 結果

分析にあたり、教師のリーダーシップの得点に基づいて、研究協力者をP機能とM機能の強いPM型、P機能のみ強いP型、M機能のみ強いM型、P機能とM機能の両方が弱いp m型に分けた。その結果、本研究の協力者である大学生が理想とする教師像の内訳は、PM型で16名、P型で10名、M型で13名、p m型で10名であった。

#### (1) 教師像と教職に対する自己有能感

大学生が理想とする教師像について、教職に対する自己有能感の値を求めた。表1は、各教師像のタイプについての自己有能感の平均と標準偏差である。

表1 各教師像における自己有能感の平均と標準偏差

	Mean	S.D.
PM	29.06	5.23
P	24.20	6.27
M	26.38	5.17
<b>p m</b>	26.30	4.76

これについて、2 (P機能) × 2 (M機能) の2要因の分散分析を行った。表2は、分散分析の結果を示したものである。その結果、どの主効果や交互作用も有意ではなかった。

表2 教師像と自己有能感の分散分析表

Source	SS	df	MS	F
Performance	0.98	1	0.98	0.03
Maintenance	72.1	1	72.1	2.31
PerxMain	67.26	1	67.26	2.16
error	1403.71	45	31.79	
Total	1544.06	48		

次にP機能とM機能と自己有能感との間の相関係数を求めた。表3は相関係数の結果を示したものである。両相関係数の有意性を検定したところ、有意な相関係数は認められなかった。

表3 教師像と自己有能感との相関係数

	自己有能感
P	0.086 ns
M	0.145 ns

## (2)教師像とメタ認知

理想とする教師像におけるメタ認知の得点を求めた。表4は、大学生が理想とする教師像における、モニタリング、コントロール、メタ認知的知識の平均と標準偏差を示したものである。

表4 各教師像におけるメタ認知の平均と標準偏差

	モニタリング		コントロール		メタ認知的知識	
PM	21.28	6.02	26.19	9.08	27.13	4.58
P	19.20	3.09	23.50	5.04	26.10	5.52
M	19.23	5.22	22.38	3.03	24.85	3.72
<b>p m</b>	19.90	5.77	20.30	5.46	21.50	5.84

イタリックの数値は標準偏差

これについて、2 (P機能) × 2 (M機能) × 3 (メタ認知) の分散分析を行った。表5は、分散分析の結果を示したものである。その結果、メタ認知の主効果が有意であった ( $F(2,90) = 16.71, p < .01$ )。Holmによって個々の差を検定したところ、モニタリングよりもコントロールの得点が有意に高いこと、さらにモニタリングよりもメタ認知的知識で

有意に得点が高いことが明らかになった。また、10%までの危険率を許せば、P機能の主効果が有意であった ( $F(1,45) = 3.54, p < .10$ )。この結果は、P機能が高い教師を理想とするものほど、メタ認知が高いことを示している。しかし、この他の主効果や交互作用は有意でなかった。

表5 教師像とメタ認知の分散分析表

Source	SS	df	MS	F	p
Performance	227.86	1	227.86	3.54	+
Maintenance	109.42	1	109.42	1.7	
PerxMain	1.05	1	1.05	0.02	
error(b)	2892.51	45	2892.51		
Metacognition	602.01	2	301.01	16.71	**
PerformancexMetacognition	19.84	2	9.93	0.05	
Maintenance×Metacognition	61.41	2	30.7	1.7	
Performance×Maintenance×Metacognition	38.19	2	19.09	1.06	
error(w)	1621.24	90	18.01		
Total	5573.52	146			

+ $p < .10$  \* $p < .05$  \*\* $p < .01$

教師像 (P機能とM機能) とメタ認知 (モニタリング、コントロール、メタ認知的知識) との相関係数を求めた。表6は理想とする教師像とメタ認知との相関係数を示したものである。P機能とメタ認知的知識の相関係数が有意であった ( $p < .05$ )。また、10%までの危険率を許せば、M機能とメタ認知的知識の相関係数は有意であった ( $p < .10$ )。

表6 教師像とメタ認知との相関係数

	モニタリング	コントロール	メタ認知的知識
P	-0.030 ns	0.219 ns	0.316 *
M	-0.044 ns	0.222 ns	0.244 +

+ $p < .10$  \* $p < .05$  \*\* $p < .01$

### (3)自己有能感とメタ認知

自己有能感とメタ認知との相関係数を求めたところ、表7の結果が得られた。自己有能感とモニタリング ( $p < .01$ )、メタ認知的知識 ( $p < .01$ )、コントロール ( $p < .05$ ) との相関係数は有意であった。

表7 自己有能感とメタ認知との相関係数

	モニタリング	コントロール	メタ認知的知識
自己有能感	0.476 **	0.284 *	0.483 **

+ $p < .10$  \* $p < .05$  \*\* $p < .01$

#### 4. 考察

本研究の主な結果は、以下の通りであった。(1) P機能とM機能と自己有能感との間で有意な相関係数は認められなかった。(2) P機能が高い教師を理想とするものほど、メタ認知が高いことを示していた。P機能とメタ認知的知識の相関係数が有意であった。またM機能とメタ認知的知識の相関係数は有意な傾向であった。(3) 自己有能感とモニタリング、メタ認知的知識、コントロールとの相関係数は有意であった。これらの研究結果を中心に、考察したい。

まず、教職を目指す大学生の理想とする教師像と教職に対する自己有能感との関係について考察したい。この点について、教職に対する自己有能感の高い学生ほど、リーダーシップの高い教師、P機能もM機能もともに高い教師を自分の理想にするだろうと予想した。しかし、本研究の結果、分散分析ならびに相関係数の結果ともに有意な関係は見られなかった。すなわち、学生の教職に対する自己有能感、すなわち自信があるということと自分の理想とする教師像のリーダーシップとの間に有意な関係が見られなかった。

なぜ教職の自己有能感と理想とする教師像のリーダーシップの間に有意な関係が見られなかったのだろうか。その原因の一つとして、教職に対する自己有能感の得点自体が低いことが挙げられる。教職に対する自己有能感の得点の最大値が50であるが、本研究の大学生の得点の平均が26.79であった。割合に変換すると、53.59%の得点であり、最大値のほぼ半分である。すなわち、大学生は教職に対する自己有能感をまだ十分に獲得していないことを示している。本研究の大学生は、教職の授業を受けているが、教育実習の経験など現場経験も十分ではなく、自分自身の教職としての自己有能感をフィードバックする機会がなく、自己有能感はこれから育っていくのであろう。そのため、教職の自己有能感と理想とする教師像の間に関係が認められなかったのだと考えられる。今後は、教育現場を経験した学生の教職に対する自己有能感と教師像を検討する必要があると考えられる。

次に、教職を目指す大学生が理想とする教師像とメタ認知との関係について見てみたい。本研究では、メタ認知の高い学生ほど、強いリーダーシップを持った教師像を持っているのではないかと予想した。本研究では、分散分析の結果においては、P機能が高い教師を理想とする大学生ほどメタ認知が高いことが認められた。また、相関係数の結果では、P機能とメタ認知的知識の間の有意な相関係数が認められた。またM機能とメタ認知的知識との間での相関係数は有意な傾向であった。これらの結果は、メタ認知を構成する下位能力であるメタ認知的知識が、理想とする教師像に影響していることを示している。メタ認知的知識とは、自分自身の認知についての知識である。具体的には、問題解決について方略について自分はどうのような知識を持っているかを認識したり、問題解決をする際に自分はどのような能力や適性なら使えるのかを認識したり、目の前の問題についてどのような



方略が効率的かを認識するなどの知識である。他方、モニタリングとは、課題遂行中の認知活動をチェックし評価をして監視する認知活動である。また、コントロールとは、課題遂行中の認知活度における計画や方略を継続したり変更修正し、課題を効率的に遂行させる認知活動である。

自分の理想とする教師像というのは、自分の能力や性格などを十分に理解し、それに基づいて自分であればどのような教師になりやすいのかのイメージでもある。そのために、モニタリングとコントロールのような、課題遂行中のメタ認知活動は現段階ではあまり関与しないのかもしれない。むしろ、自分自身を認識するメタ認知であるメタ認知的知識の方が、自分に合った理想的教師をイメージするのに有効であったのかもしれない。すなわち、自分自身がどのような力、スキル、性格、適正を持っているのかというメタ認識ができることによって、自分にとってどのような理想の教師像をイメージがしやすかったのかもしれない。

本研究では、教職に対する自己有能感やメタ認知のモニタリングやコントロールが、学生の理想とする教師像に影響しなかったとの結果が認められた。これらの要因については、授業経験など今後の教育実践な経験を積むことによって、変化するのかもしれない。これらの点については、今後検討すべきかもしれない。

## 5. 引用文献

- 阿部真美子・井田政則（2010）成人用メタ認知尺度の作成の試み *Metacognitive Awareness Inventory*を用いて 立正大学心理学研究年報、1、23-34
- Brown, A. L. (1978) Knowing When, Where, and How to Remember. In R.G.Glaser (Ed.) *A Problem of Metacognition*, Lawrence Erlbaum Associate.
- 湯川良三・石田裕久（訳）(1984) メタ認知：認知についての認知, サイエンス社
- Deci, E.L. (1975) *Intrinsic motivation*. Plenum Press: New York. 安藤延男・石田梅男（訳）(1980) 内発的動機づけ：実験社会心理学的アプローチ 誠信書房：東京.
- Flavell, J. H. (1976) Metacognitive aspects of problem solving. In L. B. Resnick (Eds.), *The nature of intelligence*. Hillsdale, N. J. : Lawrence Erlbaum Associates.
- 保坂芳男（2003a）普通科高校英語教師の資質に関する実証的研究 高校英語教育研究、17、28-42.
- 保坂芳男（2003b）中学校英語教師の資質に関する実証的研究 中国地区英語教育学研究紀要
- 保坂芳男（2004a）理想的な英語教師像に関する実証研究：普通科高校生と中学生の比較を通して 広島大学大学院教育学研究科紀要. 第二部, 文化教育開発関連領域、52、127-133
- 保坂芳男（2004b）理想的な英語教師像に関する実証研究（2）：PM理論を用いての生徒の学力差による構造比較 広島大学大学院教育学研究科紀要、53、181-186
- 石崎園子（2014）大学生の教職に対する理想像と現実像の関連性:教員志望者の教育実習前後における変化を通して、創価大学大学院紀要、36、279-304

- 久坂哲也・中村好則・平澤傑・小室孝典・佐々木聡也・佐々木亘・藤井雅文 (2017) 中学校理科・数学科におけるアクティブ・ラーニングの開発と評価 岩手大学教育学部プロジェクト推進支援事業教育実践研究論文集、4、22-27
- 松永幸子 (2015) 教職を目指す学生の教師についての意識:教師という仕事の魅力と児童生徒とのかかわり方、研修とプライベート、今後の教師のあり方にかかわって、埼玉学園大学紀要 人間学部篇、15、67-76
- 小川恵里佳・高垣マユミ・清水誠 (2017) メタ認知的活動を促すことが科学概念形成に及ぼす効果：中学校第1学年「物質の状態変化」の学習を事例にして<教育科学> 埼玉大学紀要、教育学部、66、13-26
- 三宮真智子 (2008) メタ認知：学習を支える高次認知機能 北大路書房
- 三隅二不二・吉崎静夫・篠原しのぶ (1977) 教師のリーダーシップ行動測定尺度の作成とその妥当性の研究 教育心理学研究、25、157-166.
- 三和秀平・外山美樹 (2016) 新任教師の教科指導学習動機と教職における自己有能感および健康状態との関連 教育心理学研究、64、307-316
- 豊田弘司・三木馨 (1996) 理想的教師像における大学生と教師の違い 奈良教育大学教育研究所紀要、32、133-136.
- 山内久美 (1999) 教師の教職における自己有能感と教師ストレスの関係：より実践的な学校コンサルテーションを行うために日本教育心理学会総会発表論文集、41、126
- 山内久美・小林芳郎 (2000) 小・中・高校教員の教職に対する自己認識：教師に対する有効な学校コンサルテーションのために 大阪教育大学紀要. IV, 教育科学、48、215-232

Do Metacognition and Competence Affect Image of Ideal Teacher of Students?

Haruo KIKUNO, Yuichiro KIKUNO, Qi LI & Satoshi YAMADA

Abstract

The purpose of this study is to examine the effects of competent and metacognition on image of ideal teacher of students who aim to become a teacher. The result showed that the relationship between competent and image of ideal teacher was not significant. However, the result showed that the relationship between metacognition and image of ideal teacher was significant. Students who have high metacognition knowledge believe ideal teacher who had superior P function (Performance function) and M function (Maintenance function). These results suggest that it is easier for students with high metacognition to make image of teacher.